

蔡和森の思い出

——郭紹棠の回想より・その2——

ゴ・シャオタン著
本庄比佐子訳

以下に訳出するのは本誌前号の「張聞天の思い出」と同様、Го Шаотан (А. Крымов), *Историко-мемуарные записки китайского революционера*. Москва, «Наука», 1990. から、蔡和森を回想した部分である。但し、著者が直接に関係しなかった時期についての記述は一部省略した。なお、著者については、前号を参照されたい(訳者)。

本章は、私の辿ってきた人生行路のさまざまな段階で縁あって出会った人々についての回想である。かれらについての思い出は、今でも私の胸に生きている。

もっとも忘れられない出会いは、私達をソ連へ運ぶ船中でおこった¹⁾。私達は船倉にいたが、そこには私達のために3段の板ベッドがつくられていた。船倉には薄暗い明かりがついていて、湿っぽく、陽もささず、居心地はよくなかった。みんな気分が悪くなった。船のデッキに上がって、私はまったく思いがけず蔡和森とかれの妻の向警予に出会い、また李立三(当時かれは李誠と名乗っており、上海で私はしばしば会っていた)にも出会ったが、かれも妻の李一純と一緒にであった。かれらは大きくもない船室にいて、そこは船倉に比べればはるかに快適そうであった。

初めて蔡和森に会ったのは1924年初め上海大学でのことで、かれはそこで社会発展史を講義していた²⁾。この時までには私はかれについて多くのことを聞いており、『嚮導』週刊にほとんど毎号発表されるかれの論

文を夢中になって読んだ。かれは、その雑誌の創刊（1922年）以来、編集部を指導していた。「五卅運動」の前夜およびその最中の労働者の集会で私はかれに幾度か出会っていたが、個人的に知合っていたはいなかった。私はかれより妻の向警予の方をよく知っていた。彼女はすぐれた演説家で、しばしば集会で発言して、労働者と学生たちとの話し合いを指導していたのだった。そして、船のデッキでのこの出会いであった。のちに明らかにするように、蔡和森は中共中央の代表としてコミンテルン執委第6回総会に出席するためにモスクワへ向かっていたのであり、李立三はプロフィンテルンにおける中国労働組合の代表であったはずだ。かれらの妻は、私と同様、クートベ（東方労働者共産主義大学）で学ぶためにソ連へ向かっていたのだった。

私はとても苦しい思いをしながら船の揺れに耐えていた。それ故、デッキか船室に留まって船倉にいるのを少なくするようにした。蔡和森は私にとっても親切で、私の苦しみを軽くしようと、かれの所になるべく長くいるようにと言い、レモン入りコーヒーをご馳走してくれた。航行の2日目には海は穏やかになり、みんなの気分もよくなった。蔡和森は船の食堂に私達を集め、みんなが参加した「五卅運動」の教訓を討議しようと提案した。私を含め多くの者が討議に参加した。事件の本格的な分析は、もちろん、私達の誰もできなかった。討議を総括して、蔡和森は以下のように語った。すなわち、「五卅運動」は事態が動き出したことを示す始まりにすぎず、近い将来、中国において革命運動の大きな高まりは不可避であり、それ故に新しい幹部を養成することは非常に重要である、と。君達は大きな責任を負っているのだ、とかれは私達に訴えた。

対馬海峡で船はストップした。デッキに上がってきたのは日本の水上警察で、かれらは全員に整列するよう要求し、乗客と乗組員の人数を数えた。私達に上陸は許されなかったが、果物、菓子や土産物売る多数の小舟が船に漕ぎ寄ってきた。日本の商人は中国のお金を受け取った。船の舷側から賑やかな港が見え、町が一望できた。海には、中国風に飾りつけた多くの遊覧船が浮かんでいた。対馬を離れてのち、十月革命の日である11月7日には船に赤旗が掲げられ、小さなイリュミネーションが飾りつけられて、マストに大きな赤い星が輝いた。記念のパーティー

が催されて、そこでは最初にソ連の水兵が登場し、かれの演説を楊明齋が中国語に通訳した。それから水兵のグループがギターとバラライカの伴奏で革命歌を歌った。ロシア語と中国語で「インターナショナル」を歌ってパーティーは終わった。もっとも、私達のうち僅かのものだけが当時この歌を歌うことができたのであるが。

次の日、天気は悪くなって、突風が吹き、デッキは水浸しになり、船倉は閉めねばならなかった。船は今にも転覆するかと思うほど揺れた。私は食堂のテーブルの下に横になって、おおよそ2昼夜起き上がれず、食事も取らなかった。蔡和森はこの間、喘息の発作に苦しんでいた。私達がウラジオストクに近付いた時はじめて、海は穏やかになった。ウラジオストクで私達は慣れない寒さを体験した。私達は鉄道の駅の暖かい待合室に入れられた。そこで私は初めて長い軍用外套を着て鉄兜をかぶった赤軍兵士を見た。

蔡和森与李立三はそれぞれ妻とともに、私達と別れてホテルへ向かった。その前に私は、私が「五一」クラブの支配人に渡さねばならない中国語のマルクス主義文献の荷物を持っている、と支配人に伝えてくれるよう、蔡和森に頼むことができた。出発の前夜これを私に託したのは、上海の党組織の指導者の一人で、モスクワから帰国して間がない王一飛であった。後にかれは中共湖南省委員会書記になり、長沙で軍閥に銃殺された。荷物を受取りに私のところへ来た「五一」クラブの支配人は柯怪君と言った³⁾。

かなり長く待ったのち私達はいよいよ列車に乗せられたが、発車までにはさらに長い間待たされた。蔡と李は夫人たちと個室にいた。モスクワまでの旅は2週間続いた。蔡和森はたびたび一般車両の私達のところへ来て、長く話していた。かれはとても付き合いのいい人物で、冗談を言うのが好きだった。旅の時間をかれは第6回総会における報告の準備にあてた。当時の地下活動下にあって多くの資料を持って来ることはできなかったの、かれは主に記憶を頼りに書いていた。

モスクワで蔡和森与李立三は「リュクス」ホテル（コミンテルンの宿舎）に泊まった。かれらの妻は私達とともにクートベに入学した。

ここで、モスクワの中国人留学生間の状況について語るために、少し後戻りをしなければならない。到着後、私達はそれら留学生の仲間入り

をし、まもなく気がついたら、のちに「地区委員との闘争」および「ラファイロフとの闘争」として有名になった事件に巻き込まれていた、という状況だったからである。問題はこういうことであった。モスクワにはすでに1920年に地区委員会レベルのいわゆる中国共産党モスクワ支部(旅莫支部)が結成されていた⁴⁾。そしてその先頭にいと見倣されていたクトベ細胞の指導者は、袁慶雲(ヤノフスキー)、劉伯堅(シャスティンスキー)、そして王仁達(アウグストフ)であり⁵⁾、クトカ(中国孫逸仙労働者大学)の全権代表は任卓宣(ラファイロフ)⁶⁾であった。「中共モスクワ支部」は正式には法的地位を持たない組織であった。何故なら、ソ連領域内でソ連共産党ではなく外国の党に所属する党組織は存在することができなかったのだから。また、「中共モスクワ支部」の活動の自主性を提唱する者たちはつぎのような考えを宣伝した。すなわち、支配政党になったソ連共産党では革命闘争は背後に押しやられており、それ故にその経験は単に歴史の問題として学ぶべきであり、またその経験は古くなってしまい、中国の現状で実際行動に適用するにはすでに役に立たない、と。かれらは、ソ連の共産主義者とコミンテルン指導部はせいぜい政治路線の全般的方向を決定することで中国の共産主義者を援助できるが、日常の実際活動において中共が直面している問題を深く追求することは出来ない、と断言した。

マルクス・レーニン主義の理論を学び、身につけるためにモスクワに、そして大学に着いた私達にとって、読書や学習に努力することが悪いことであるかのように、あるいは、それは「アカデミズム」だといったような、またロシア語を学ぶことは「好ましくない」かのように示唆されだしたのは、全く思ってもみなかったことであった。何故なら、私達は実践活動のためになるべく早く帰国せねばならず、ソ連に長く滞在してはいけない、というのであったが、短期間にロシア語を習得することは不可能に等しかった。熱心にロシア語を学んでいた者は脱落者とみなされた。「中共モスクワ支部」は、「戦闘的な訓練」「鉄の規律」「絶対服従」「思想のプロレタリア化」「行為のプロレタリア化」「ブチ・ブルジョア性と知識人精神の除去」等などの方針を提起した。これは実際には何を意味したのか。例えば、私のところへ鉛筆とノートを持った人が絶えずやって来て、しばしば挑発的な質問をしながら、政治的な、また

生活上のさまざまな話をした。かれは私の答えを詳しくノートに書き込み、あとでそれを指導部に知らせた。

まもなく開かれた「批判集会」では、私に批判的な発言の嵐が集中し、非難されればそれだけ私の罪が暴かれ、そのことに私は茫然とするだけであった。中国でも当時そのような「批判集会」は共産主義者の間で行なわれたが、そこでは実務的な雰囲気のみならず、実践上の疑問やさまざまな問題点、それらの解決に向けての方法が討議された。誰かれの同志の個人的な行為についての問題が討議される時には、肯定的な面についても否定的な面についても語られ、会話は同志の忠告の精神でなされた。モスクワでは、行為、思想、気持ちのネガティブな要素についてだけ話され、しかもそれはお説教調であった。私は釈明しようと試み、証拠をあげて私の発言の歪曲が見逃されていると主張したが、叱責の叫びと侮辱を雨あられのように浴びせられた。そうして分かったことは、私には、告白して自らの過ちを認め、自己を非難し、懺悔する権利だけがある、ということであった。しかも、その際に示された「同志的援助」に対して感謝しなければならなかったのである。これ以後は私のところへ来る誰にもそのように対応した。

「戦闘的な訓練」において、これら「聖人のよう」で、完全で、そして鍛え上げられた指導者はいったい誰だったのか。かれらはフランス、ベルギー、ドイツから来て、数年間中国の現実から離れており、中国の革命闘争には参加していなかった。私たちが直接参加した「五卅運動」やその他の革命的な事件について、かれらは新聞報道と人の話から集めた曖昧な知識しか持っていなかった。国内の情勢や我が党の活動についてのかれらの考えは、私たちが吃驚するほど理想化されたものであった。そして、これらの「指導者たち」は、中国から来たばかりの私達を「戦闘的な訓練」の助けを借りてイデオロギー的に「鍛え直し」たいと思っていた。このような支離滅裂なことについて私達は親しい友達仲間でもそひそ話し合っていた。1925年末から26年初のこの短い期間に起ったことについて今思い出すと、「反右派闘争」と「文化大革命」の時代に行なわれたあらゆることとの比較が自ずと頭に浮かんでくる。このような場合いつも、仕事の形式、方法やスタイルに、人間関係のあり様に、そして生活全般の雰囲気のなかに現われてくるのは、中国の「秘密結社」

の気風と習慣である。

しばらくして、劉伯堅は臨時集會に私達を召集した。かれは興奮し怒りに燃えながら、クートベとクートカの党指導部が「中共モスクワ支部」を規定にない組織として解消することを決定したと、私達に知らせた。そしてかれは、この組織の解消が中国革命の事業に取り返しのつかない損害をもたらすだろうと主張して、抵抗を準備する集會を参加者に呼びかけた。出席者の多数は劉伯堅に同調した。しかし新入生のうち私と私の仲間はひそかな喜びを感じた。果たしてかれらは私達が忠誠心を欠き、異分子、危険分子であろうと疑い、私達の名はブラック・リストに載せられた。この後まもなく、1926年1月中旬のいつか、コミンテルン執委第6回総会の終了後、クートベに蔡和森がやって来た。かれは「危険分子」や「動揺分子」も含む全員を集めて、「モスクワ支部」擁護に立つ人々からも、これに対立する意見を持つ人々からも意見を聴取し、また、「アカデミズム」批判、「逃亡者の傾向」の摘発、密告、無実の罪などによって生じた私達の不満や疑問にも耳を傾けた。蔡和森は、このすべてに馬鹿げたことが多すぎると言い、党は私達を学習のためにモスクワへ派遣したのであって、おしゃべりをするためではない、と語った。かれは又、組織問題に当たっているのはコミンテルンとソ連共産党中央であり、近い将来かれらは判決を下すだろう、とも言った。この時まで私達はお互いを殆ど知らず、「分派主義」だと責められないために付合いを恐れていたが、集會は私達の団結を促したのであった。しかし、この後もまだ丸1カ月間、毎夕荒れ狂った集會が行なわれた。「モスクワ支部」の擁護者たちは使い古された論拠を利用して何時間も話し、「反逆者」に恥辱を与え、クートベのボリシェビキ党組織の代表たち――ベルマン、クチュモフ、ヤコブソン、プラーゲル等と激しい議論を戦わせた。このような状況はクートカにもあった。ついにコミンテルン執行委員会の組織部長ヴァシリエフが集會に来て、コミンテルンとソ共中央は「中共モスクワ支部」を規定にない組織として解散することに決定した、と伝えた。中共中央はこのような遠方にある自己の組織を実際上指導できないだろう、とかれは語り、「モスクワ支部」は事実上どこにも属さない自治組織の状況にあることが分かり、そのような状況は正常ではない、と言った。それ故にすべての組織工作、政治教育工作は再編されねばな

らず、ソ共の指導に従わねばならない、とも語った。何人かが抵抗を試みて、西ヨーロッパやアメリカで中国の共産主義者は自主的な組織の下に団結できるのに、なぜ社会主義の国、ソ連ではそれが禁じられるのか、と抗議した。そのとき蔡和森が発言して、「コミンテルンとソ共中央の決定を審議すべきではない、それは実行しなければならないのだ。この問題についての議論は停止すべきである」と述べた。

クートカにおける「国民党モスクワ支部」の今後のあり方について同様の問題が起った。メンバーの国民党員たちは、国民党支部が世界の多くの国々に存在していることを引き合いに出して、それなのに何故ソ連で活動することができないのかと執拗に尋ねた。かれらの得た回答は、ソビエト憲法によればソ連には唯一つの政党があり、その他の党の存在や、さらに外国人より成る党の存在は、たとえそれが友好的であっても容認しがたい、というものであった。蔡和森も参加した緊迫した議論の結果、次のような妥協的解決が見出された。すなわち、モスクワに居住する国民党員の組織は公式には「同郷人会」と呼ばれることになるが、国民党員自身は従来通りこれを「国民党支部」とみなす、と。

「中共モスクワ支部」の解消後、雰囲気はよくなり始め、デマゴギーやセクツ的な働きかけ、密告そして細々した言い掛りはぐんと少なくなった。人々はこれまでより勉強するようになった。蔡和森はほとんど毎日クートベに出入りした。かれは中共党史の講義を、李立三は中国の労働運動史に関する講義を始めた。かれらの講義は、中国における労働運動史の体系化を初めて試みたものであった。私はそれを詳しく書き留め、その後1934年に私自身の修士論文を準備する際に利用した。蔡和森の講義録は辛うじて無事に残り、1980年に中国で出版されたかれの著作集に入れられた⁷⁾。

クートベとクートカで中国の学生たちは勤勉にロシア語を学んだ。数カ月後、私達のうち幾人かは早くも露中辞典の助けを借りてブラウダの記事を読むことができた(露中辞典は当時まだなかった)。私達は、蔡和森もまた猛烈にロシア語を学んでいて、露中辞典を使って多少のロシア語を読んでいることを知った。

1927年初め、コミンテルン執行委員会に附属する国際レーニン学院が創設された。蔡和森はその聴講生になった。かれは真剣に勉強して、中

国語とフランス語の多くの文献を読んだ。私はほとんど毎日かれのところへ行った。かれからロシア語のさまざまな本——マルクスの『資本論』、エンゲルスの『反デューリング論』、レーニンやプレハノフの著作、ロシアの文学作品、ロシア史と世界史、政治経済学、哲学関係の著作——を買ってほしいと頼まれた。当時クートベの校長ブライドはオーギズ（国営図書出版所合同）の理事長をも兼職していたので、クートベの学生たちは割引で本を買えたのだった。蔡和森はモスクワの気候に適應するのに難儀していて、しばしば病気になる、時には呼吸困難から全身まっ青になり、やっとのことで物を言い、何も食わず、息を切らすほど喘息の発作がひどかった。かれの部屋では何か草の香を薰いていて、それでかれは楽になった。そうした日には私はほとんどかれの傍を離れなかった。私たちは親しくなり、多くの政治的な話題について話し合い、自分のことについても語り合った。

(中略)

1924年以降、蔡和森は李立三、鄧中夏、劉華等とともに上海で労働運動を指導した。従って、中共中央がモスクワのコミンテルン執委第6回総会にかれを代表として派遣したのは、全く当然のことであった。蔡和森がモスクワにいた間に、中国では大事件が起った。革命的昂揚の波のなかで、北方の軍閥に対して国民革命軍の北伐が始まった。国民革命軍は湖南、湖北、江西の諸省で上首尾の作戦を行なった。1926年10月10日、華中の武漢三鎮が攻略された。1927年2月、上海に武装蜂起がおこり、南京から軍閥の軍隊が掃蕩され、華東の諸省が革命政権になった。モスクワにいた者はみんな興奮に包まれた。蔡和森はクートベとクートカの学生たちを前に、事件の今後の展開について系統的に分析と予測を行なった。かれは現実的な政治家で、革命運動途上の困難を見通していた。とくに、私との話のなかで、かれはいつも、中国の主たる住民である農民大衆が立ち上がって積極的な革命闘争に加わらないうちは、中国革命の勝利を期待することはできない、と強調していた。これと同様な考えをかれは1925年⁸⁾4月、長沙での集会で語り、農民大衆の武装を要求し、そして農民運動を指導する勢力は労働者階級でなければならない、と強調した。

1927年3月末、蔡和森は中国へ戻って、4月武漢で開かれた中共5全大会に参加した。再び中央委員に選ばれ、中央政治局員に加えられた。同年6月、私も中国へ向かった。武漢の危機と国民党の裏切りののち、極秘のうちに8月7日、武漢で中共指導部の緊急会議が開催された。そこで陳独秀の日和見主義的誤りがはっきりと批判された。蔡和森は発言のなかで陳独秀批判を積極的に支持した。この会議でかれは中央政治局員に選ばれたが、会議の直後、中央北方局書記に任命された。工業都市唐山で、蔡和森は鉱山労働者の労働運動を指導した。北方局の活動家会議で、かれは中共における日和見主義の歴史について報告を行なった。報告の原稿はモスクワで書き上げられ、ロシア語に翻訳されて *Проблемы Китая* (『中国問題』) (1929年1号) に発表された⁹⁾。

1928年5月、私は再びモスクワで蔡和森に会った。かれは同年6月にモスクワ郊外で開かれた中共6全大会に参加するために来たのであった。私は少し早く28年初めに中国から戻った。私は大会の資料と文書の翻訳の仕事に引き入れられた。大会で蔡和森は中央委員会の政治報告と農業問題および労働組合運動についての報告を行ない、陳独秀の右翼日和見主義路線と同様に瞿秋白の暴動主義の誤りをも批判した。大会はかれを中央委員に選び、6期1中全会でかれは政治局のメンバーに入れられた。大会終了後、かれは直ちに上海に戻ったが、そこには苛烈なテロの下に困難な仕事がかれを待っていた。反動派による大打撃から未だ回復していない党は複雑な状況におかれていた。6全大会の決定により中央総書記として党のトップに据えられたのは、無学な武漢の労働者の向忠発であった。中央の「主要構成員として労働者を参加させる」問題は正式に決定されていたが、実際のところかれに対する党の政治的、組織的指導は確かではなかった。モスクワを去る前に蔡和森が秘かに私に語ったのだが、かれは武漢で向忠発をよく知っており、向はまさに労働者らしい労働者ではあるが、党のトップ指導者の仕事はかれの能力に応じたものではない、と。さらに向は少しホラを吹くのが好きで、虚栄心が強かった。ので、かれと一緒に働くのは容易ではなかった。事実、向忠発は全く公式的に総書記とみなされていたのであって、実際に主に仕事をしてしたのは蔡和森、李立三と、コミンテルン6回大会参加のためモスクワ滞在を少し延ばした周恩来であった。

1929年初め、蔡和森は治療のためにモスクワへ来たが、病気にもかかわらず、駐コミンテルン中共代表団の工作に積極的に参加した。当時モスクワには、瞿秋白、張国燾、鄧中夏（プロフィンテルン大会への総工会代表）、黃平、陸定一（キムへの中国共青团代表）ら、6全大会とコミンテルン6回大会後も留まっていた中央委員の団がいた。

この時期、私は赤色教授養成学院で学びながら、コミンテルン東方書記処で働いていた。蔡和森とはしばしば会った。というのはお互い近くに——かれはホテル「リュクス」、私はニコリスキー通り（現、10月25日通り）——住んでいたの、互いに訪問しあって、たくさんのかたを話し合った。

1929年秋の東支鉄道紛争のとき、蔡和森は、中国の兵士と住民の間に撒く中国語のビラの作成を任務とする中国人同志のグループ（そのメンバーに私も入っていた）を指揮した。私達は、東支鉄道紛争に関して中共中央に宛てた陳独秀の3通の書簡を熱心に研究し、中国研究所における陳独秀主義についての討論に参加した。この時、蔡和森は辛亥革命から1929年に至る中国革命史を書き始めた。かれは主として自己の記憶にたよりつつ、モスクワにある資料や、かれが以前に書いた「中国共産党史的発展」「党的機会主義史」も利用して、その仕事をした。かれは原稿を分けて私に見せ、意見を聞いた。かれのこの著作は、ヴィシニャコヴァ、ウラジミロヴァ、バシコヴァ、ベルリンら中国研究所の所員によってロシア語に翻訳された。翻訳はよいできではなかったが、基本的な内容は正確に伝えていた。それはただ1部が現存し、中国学図書館に保存されている。残念なことに、中国語の原稿は残っていない。1980年に中国で、1918—31年に書かれた199編の主要著作を収めた『蔡和森文集』が出版され、そこには「中国共産党史的発展」と「党的機会主義史」も入っている¹⁰⁾。しかし、蔡和森の最後の、そして最大の著作である「中国革命史」はこの『文集』には入れられていない。中国ではこの著作のことが知られていないか、或いはそのテキストが見つからないのであろう。

1930年、中共中央の代表として蘇（音訳）の名でモスクワに来たのは周恩来であった¹¹⁾。かれは、コミンテルン執委幹部会議で中国の情勢と中共の活動について詳細な報告を行なった。それを通訳したのが私で

あった。周恩来の報告はその後東方書記処でさらに詳しく審議され、その審議には蔡和森、瞿秋白、張国燾らが参加した。

周恩来とその他の主な中共代表たちがモスクワにいる間に、中共の指導部はいつの間にか事実上、李立三の手中に入っていて、かれは中国革命を強行する冒険主義的な計画を実行し始めていた。全国的な武装蜂起の指導のために、かれは党の最高機関の機能をもたせた「行動委員会」をつくった。委員会の議長はかれ自身で、向忠発は総書記とはいえ、そのポストは全く名義だけのものであった。李立三が極左的な路線を実行し始めたことについて、私達はコミンテルン執委に送付された「行動委員会」の通告からそれを知り、また『紅旗』誌の報道で知った。これらの資料は李立三指導部が次のような結論に達していたことを示している。すなわち、あたかも中国において直接的な革命情勢と全国的な武装蜂起の時機が熟し、中国紅軍は大都市に向かって直ちに進撃しなければならないかのような、そして帝国主義者の侵略に対する闘争においてソ連は中国革命に軍事的支援を行なうべきである、といったことなどである。私達（張聞天と私）はこれら全ての点について報告書と口頭連絡のなかでコミンテルン執委に知らせ、個々の通告や論文をロシア語に翻訳し、東方書記処と政治書記処の会議で報告した。同時に私達は、国際レーニン学院やその他の学校で学んでいる中国人学生たちの間で、大宣伝活動を行なった。

中共中央に宛てて、李立三の冒険主義的な路線を非難するコミンテルン執委の指示文書が送られた。李立三自身は急遽モスクワに呼ばれ、1931年初めに着いた。駅にかれを迎えたのは張国燾と私であった。蔡和森は気分がすぐれなかったので、「リュクス」で待っていることにして、私達はかれを連れていかなかった。張国燾の部屋に集まって、私たち——蔡和森、張国燾、かれの妻の楊子烈、私、そして少し遅れて加わった張聞天——は、李立三のつぎのような熱狂的な話を注意深く聴いた。すなわち、中国における革命運動の大成功について、直接的革命情勢の有無について、全国の大衆は十分に武装蜂起の準備ができていて、ただ我々の指示を待っていることについて、国民党軍の内に共産党の支持者がいて、兵士たちは士気を喪失していることについて、などなど。私たちはかれと議論しようとは思わず、モスクワでは中国情勢について異なった

評価をしているとだけ述べて、話し合いを翌日に延期した。

翌日、李立三とマジヤール及びクチュモフとの会談が行なわれた。数時間後、東方書記処の拡大会議が召集され、そこで李立三は到着した日に私達に語ったと同じ虹色の情景を描き出した。この会議で、またその後のコミンテルン執委幹部会の会議でも、李立三の政治路線と実践活動は仮借ない批判を受けた。中国の同志たちからは蔡和森、張国燾、張聞天、私らが発言した。蔡和森は非常に辛辣な発言をした。かれの演説が他の人と異なっていたのは、かれが李立三の冒険主義を批判したばかりでなく、党における左翼日和見主義的誤りの起源を分析したことであった。自己の経験に拠りながら、李立三に自らの誤りを認めてそれを改める勇気をもつこと、何故なら、他に出口はなく、そうすることが如何に困難で苦しくとも、自尊心を棄て、誤魔化さずに犯した誤りをきっぱりと正さねばならない、と呼びかけた。同時に蔡和森は、ふたたび自己の経験を引きながら、こうした場合にしばしば起りがちな、反対の極端に走ることに注意を促した。

蔡和森の発言は、張国燾の発言（後者の原稿は私も加わって準備され、私がロシア語で読み上げた）と同様に、なぜかサファロフの気に入らなかった。サファロフは、君達は自らの誤りについて多くを語ったが、それはしない方が良かったのだと言わんばかりの言葉を投げつけた。これは、つい先ごろ黨員証を取り戻したばかりの人¹²⁾の口から出た言葉としては、かなり異常な感じがした。蔡和森はつぎのようにうまく答えた。「何もしない人だけが誤りを犯さないのであって、誤りを犯した以上は、それを誤魔化して隠すよりも認めて改めるほうがよいのだ。」

幹部会の会議で、李立三は全面的に自らの誤りを認め、誤りがもたらす事態の掃蕩のために党に協力することを約束した。蔡和森は私に、モスクワの雰囲気の影響されて李立三は非常に速やかにそして率直に誤りを認めたが、おそらくかれは自分がしたことを本当に深く認識してはいないだろう、と語った。蔡和森は、李立三自身に遠慮して他と同じような発言をせず、誤りについてよく考え、それを改める方法と党の事業にもたらした損害を軽くする措置を考えるようにとの忠告に止めたのであった。

李立三は、宣告を受けたのち、しばらくの間世界労働組合連盟の代表

としてプロフィンテルンで働き、その後、中国から来た李維漢と共に李明の名で学習のため国際レーニン学院の特別班に入った。その頃、中国ではモスクワから帰国したばかりの周恩来と瞿秋白の参加の下に3中全会が開かれ、そこでも李立三の理論と実践が非難された。

1931年初め、蔡和森、張国燾、張聞天と私は帰国することを決めた。私達は相談のためにニコリスキー通りの私のアパートに集まり、将来の仕事の計画について協議を始めた。当時、党内では民主主義的なやり方が支配的であったので、仕事の割当てに際しては個人の希望や同志たちの意見がかなり入れられた。党から委された任務を遂行することは、当時、地位の威信とか物質的、社会的状態と関係なかった。すなわち、リスクと責任のほか、如何なる利益も特典も期待できなかった。私達が中国に帰着後、自分たちの希望をなるべく考慮して仕事を与えてほしいと中央に願い出ること、そして出発を前にしてこの点をコミンテルン執委指導部に知らせることを決めた理由は、ここにあったのである。蔡和森はソビエト区に行きたいとの希望を表明していた。張国燾は、私達みな意見では、かつてと同様に組織工作を指導すべきであった。張聞天は宣伝部を率いるべきであった。かれらは私に、コミンテルン極東ビューローと中共中央との連絡のために、中央の代表として上海の同ビューローで働くようにと勧めた。最後の瞬間になって、コミンテルン執委書記のピヤトニツキーは、ロシア語に堪能であるとして私か張聞天にしばらくモスクワに留まることを勧めた。同志たちは私に白羽の矢を立てた。当時、駐コミンテルン中共代表代理は黄平（ヴォロフスキー）で、蔡和森、張国燾と張聞天の意見によれば、かれは資格に欠ける人物であった。私はかれらに実務面で黄平を助けるように頼まれた。私は当時このほかに、国際レーニン学院やクートベの中国人留学生の間で多くの教育活動を行っており、またモスクワ、レニングラード、オレンブルグやその他の都市のさまざまな軍事、技術学校で学ぶ中国人の同志たちを指導していた。

1931年春、蔡和森、張国燾、張聞天と楊尚昆は上海に着いた。ソビエト地域へ派遣してほしいという蔡和森の願いは叶えられず、かれは広東の党組織が大崩壊した後の華南における党工作の指導を委された。1931年3月、蔡和森は中央の全権代表として、当時中共広東省委員会のあつ

た香港に向かった。蔡和森の甥の劉昂の証言によれば¹³⁾、蔡は到着後、「酒と缶詰」の商店の2階に住んだが、まもなくスパイと刑事がかれを見つげ出した。1931年6月21日¹⁴⁾に海員組合の会合が定められていた。同志たちは危険な状況を考えて、その会合に行かないように忠告したが、蔡和森はかれらの警告に注意を払わなかった。午前11時、4人のスパイと刑事がかれを取り押さえたので、かれは会合のある室に入ることはできなかった。党組織は蔡和森を救うために全力をあげた。すなわち、身代金のために多額のお金が集められ、社会团体や当局の有力者たちがかれの保証人になると香港政府に願い出た。しかし遅かった。身代金が渡される2時間前に、香港の植民地政府は蔡和森を国民党の秘密警察に引き渡して、広州へ移送していた。残忍な拷問や甘言の約束を物ともせず、蔡和森は毅然として動揺せず、あらゆる説得と約束をはねつけた。激怒した刑事はかれを釘で磔にし、銃剣で胸と腹を刺し通すという最も残酷で苦しい死刑に処した。かくも英雄的な死を遂げたのは中国共産党の創立者で指導者の一人であり、中国革命の事業のために闘った不屈の戦士であった。

かれは36歳であった。命懸けの短い一生に蔡和森は非常に多くのことを成し遂げ、大きな理論的遺産を残した。

長い間、とりわけ「文化大革命」の時期、中国では蔡和森の名は忘れ去られていた。「四人組」の失脚後すぐ、かれに関する真実が完全に回復し、今の中国では深い尊敬の念をもって追慕されている。1980年、蔡和森の生誕85周年に関連して、中国で『蔡和森文集』(上に触れた)と19編の文章を収めた『回憶蔡和森』の2冊の本が出版された。回想文の執筆には蔡暢、李立三、李維漢、茅盾、許德珩、成仿吾、蕭三、羅章竜、王一知(張太雷の未亡人)、劉昂らがいる。かれらは、この情熱的な革命家、不屈の共産主義者、信念をもった愛国者で国際主義者の英雄的な生涯と活動の確かな状況を描写している。

註(*を附したものは原註)

- 1) 著者は「張聞天と同じ時にモスクワへ行」った、と述べ(本誌前号、36頁)、また本文にも船中での楊明齋にふれていることから、1925年10月28日に上海を出てソ連へ向かった船のことと考えられる。これにはモスク

ワのクートカへの第1期留學生の第2グループ(張聞天、王明ら60余人)が乗っており、楊明齋が引率していた(曹仲彬・戴茂林『莫斯科中山大学と王明』、黒竜江人民出版社、1988、25頁)。

- 2) 著者は1924年に上海大学中国文学系に特別生として入学、社会学系の講義もしばしば聴きにいった、という(Го Шаотан, с.44, 47-48.)。

* 3) 1957年の上海旅行の時、中共上海市委員会第一書記・東南局書記の柯慶施が妻と娘を伴って、私を昼食に招待してくれた。話していて2人とも驚いたのだが、かれがあの時の柯怪君その人であると分かった。残念なことに、時が私達をまるで分からない程に変えていた。この思いがけないことが私達を近づけ、それから古くからの知己であるかのように語り合った。

- 4) 中共モスクワ支部は、1921年5月に開校したクートベへの第1期留學生であった蕭勁光によれば、同じグループの劉少奇、彭述之、羅亦農らが同年末に組織した、ということで(蕭勁光「憶早期赴蘇學習の少奇同志」、『懷念劉少奇同志』、湖南人民出版社、1984、89頁)、これが中国では通説化している。ロシア革命当時、ロシア各地にいた中国人労働者の間で1920年に「旅俄華人共産党中央組織局」が成立しているが(黃慰慈・許肖生「海外同胞与中国共産党的創建」、『中共党史資料』第38輯、中共党史出版社、1991、148頁)、これと後の留學生の組織との関係は明らかではない。また、著者は続いてモスクワ支部の中心がクートベ細胞であると述べていることからしても、クートベ創立以前、1920年にモスクワ支部が結成されたというのは著者の誤りであろう。

- 5) 勤工儉学のフランス留學生達が結成した中共ヨーロッパ支部は1923年以降、党中央の指示によりメンバーの中からモスクワへの留學生を送り出した。袁慶雲はその第一陣、劉伯堅は第二陣に入っており、当時のモスクワ支部の責任者は羅亦農と彭述之。その後、劉伯堅が支部書記に選出された(王永祥・孔繁豊・劉品青『中国共産党旅欧支部史話』、中国青年出版社、1985、250-252頁。陳永久『劉伯堅將軍伝』、解放軍出版社、1987、104頁)。

* 6) すなわち葉青。帰国後、国民党の青年組織である「三民主義青年団」の指導者になり、戴笠(蔣介石の情報保安機関の首脳)と一緒に働いた。「モスクワ支部」で葉青は「マルクス主義理論家」として聞こえ、多くの論文やパンフレットを出版したが、それらは本質的にはトロツキストの思想を宣伝したものであった。

- 7) 蔡和森らの講義について、幾つかの中国の文献は中共クートカ支部の招請に応じたとする(羅紹志等『蔡和森伝』、湖南人民出版社、1980、124頁、ほか)。しかし、著者と同じ時期、1925年11月にフランスからモスク

ワに来てクートベに入学した施益生は、つぎのように回想している。すなわち、蔡和森らの講義はコミンテルン東方部の推薦と劉伯堅の招請によりクートベの中国クラスで行なわれ、蔡の講義をさらに学習するためにクラスの皆のノートを対照、整理した講義録を謄写印刷し、小冊子を作ったが、それが今に伝わった、と（施益生「対蔡和森、向警予同志的回憶片断」、『革命回憶録』、人民出版社、1982、3-4頁）。その小冊子「中国共産党史的発展」について、周一平『中共党史研究七十年』（湖南出版社、1991、24頁）などは向警予らが作成したと説明しているが、これは、向警予や著者を指すと思われる郭肇唐が同じクラスにいたとも述べる施益生の回想（施前掲、2頁）と矛盾しない。

この文章は1980年出版の『蔡和森文集』（人民出版社）には収録されていない。『蔡和森的十二篇文章』に収録されているそうであるが（羅紹志等「蔡和森」、『中共党史人物伝』第6巻、19頁）、訳者未見。

- 8) 1927年の誤りではないか。「在国民党湖南省党部歡迎会上的演講詞」（1927年4月1日）が、革命における農民の重要性について述べている（前掲『蔡和森文集』、766-768頁）。
- 9) 「党的機會主義史」は中国では『順直通訊』第2期に発表された。羅紹志等前掲書は、モスクワで整理、発表され、のちに又『順直通訊』に掲載された、とするが（144頁）、周一平前掲書は、6全大会後モスクワから帰って原稿を修訂し、『順直通訊』に発表、後にロシア語に翻訳、発表されたとする（37頁）。
- 10) 入っていない。しかし、著者がここで述べている説明は、註7で触れた『蔡和森文集』を指している。
- 11) 中共中央文献研究室編『周恩來伝；1898-1949』は、周恩來が偽名のパスポートで出国したとは述べているが、その名が何といったかには触れていない（213頁）。
- 12) ジノヴィエフ派の有力メンバーとして1927年12月、ソ共第15回大会で除名処分となったが、自己批判して翌年復党、29-30年コミンテルン東方部で働き、中国問題に関わった（B. Lazitch & M. M. Drachkovitch, *Biographical dictionary of the Comintern*. Hoover Institution Press, 1973, p. 354）。
- *13) 『人民日報』1979年8月26日。
- 14) 劉昂の原文は11日。なお、羅紹志等前掲書は10日としている（154頁）。